歴史的な生活環境における境界空間の構成原理に関する考察

朴 文 浩*
近 藤 公 夫*

A Study on the Principles of Composition on the Interface Space in Historic Environment for Living

Moonho PARK
Kimio KONDOH

摘要：歴史的な生活環境を考える場合、住居、ブロックのような生活成層間の伝統的な境界空間構成の変化が注目される。そこで、変化する境界空間の構成原理を把握するために旧奈良市街地をとりあげ、境界空間にかかわる生活欲求、境界空間の変遷特性、緑の形態的特性を検討し、それに基づいて、境界類型及び緑の形態的特性を抽出した。なお、要素相互間の因果関係分析により定性的傾向を把握した。

1.はじめに

歴史的な生活環境は地域の社会的、文化的条件にふさわしく形成された生活空間が、歴史を通していろいろな変遷過程を経て地域固有の独自性を維持しているものであり、歴史的評価の重要性と共にその保全の必要性が認識されてきた。ところで、今日の歴史的環境の保全は文化財、たとえば、特定の建築物などの保全として行われているに過ぎず、その視点を日常生活環境へ向けて生活空間の伝統的な構成原理を見定めるなどその課題を拡大して検討する必要がある。一方、日常生活環境は生活領域の拡大と共にC. A. Doxiadis がEkistics で提案する通り生活圏の階層別に住居、ブロック、近隣、住区、都市などの生活空間成層(The hierarchy of living space)を成している。¹⁾ この成層は相互間の異質性を媒介・統合する機能を持つ境界空間により特徴付けられ

ると考えられる。

造園の領域において歴史的環境の修景は重要な課題のひとつであるが、ここでも生活環境に成層性が認められる以上、その境界空間を如何に考えるかは無視できないであろう。すなわち、伝統的な空間構成の原理を歴史的景観の変化など時間の流れを通じて読み取る上に境界空間に注目する意義は大きいと考えられる。

今日、歴史的な生活環境における生活空間成層(住居、ブロックなど)の伝統的な境界空間の変化は、人間の新しい生活欲求による境界空間の伝統的な類型の変化及び緑の役割や形態の変化としてとらえられる。

従って、本研究は歴史的変遷を経てその地域の生活にふさわしく形成された伝統的な生活空間が比較的古い状態として残されている旧奈良市街地の元興寺周辺8ブロック(214戸)、その変化が進んでいる半田町周辺8ブ

図-1 調査対象地の敷地割り

* 奈良女子大学大学院

ック（180戸）を対象として、歴史的な生活空間の境界空間に表象される空間の秩序—構成原理²⁾を人間の生活欲求、伝統的境界要素の変遷特性、境界空間における緑の形態の特性の側面から検討し、生活環境における境界空間構成の特徴を明らかにすることを目的とする。

研究の方法としては、まず文献調査を通して対象地の歴史の変遷過程、境界空間の形成要因を把握し、次に現地調査で各戸の境界空間の類型、緑の形状を調査し各戸別の境界空間の連続平面図を作成する。また、航空写真（昭和37年、昭和57年）³⁾を利用し、ブロック内部の形状、各住戸内部の緑の分布位置や形態の変化をとらえろと共に境界空間の変化や境界空間に対する欲求について各戸別インタビューを（一部のみ）行った。

2. 歴史的な生活環境における境界空間の特性

伝統的境界空間はその歴史的な形成要因、住居における緑のあり方、人間の境界空間に対する欲求を主要な課題としてその検討によりとらえられる。すなわち、近世の街区割り、町割り、敷地割りのような環境上の条件にしたがい、敷地いっぱい建つ住居の内部に中庭、裏庭などの緑が取り込まれ、道路から距離に応じて段階的にプライバシーを求める伝統的仕組みにより組み立てられるといえよう。

さて、伝統的な生活空間の境界の特徴として藤井は連続的で柔らかな構造、複合的な機能、境界として了解されるサイン性、シンボル性をあげる⁴⁾。この観点から歴史的な生活環境を見直すと、伝統的な境界空間において硬構造化、伝統的なサイン性の喪失などの変化のあることに気が付く。また、一方ではそうした変化の中で変わらない境界空間の特徴や構成原理がみられる。

対象地は平城時代の条坊制を初期条件として近世の街区割り、町割り、敷地割りによって道路を挟んで住戸が向かい合う関係を形成し、今日まで続けられてきた地区である。図-1は奈良町が形成された後、明治23年の地籍図に基づいて作成したものである。今日の敷地割りは、部分的に敷地の統合、分割された場合が現れるが、近世以来続けられてきたことが確かめられる。このような敷地条件の中で各住戸は道路に接して主屋をおき、続いて生活上の欲求と敷地の奥行きに対応して中庭、裏庭を設ける。なお住戸の集合体としての秩序は各住戸の主屋の奥行きがほぼ一定であり、主屋の通風、明りなどの環境条件を維持するために中庭、裏庭部分を隣家と連続的につなげることによりうまれる。このような伝統型住戸（建物の外観及び構造が奈良町家風の比較的古い様式として保持されている住戸）における中庭、裏庭などの内部的緑の分布は、敷地の条件により規定される⁵⁾。図-2は対象地区の住戸の敷地条件—敷地の奥行き、敷地内の主屋の位置（接道する場合：1～5型）—に対する緑の

図-2 敷地における緑の分布

分布状態を示している。伝統型住戸の緑の分布は奥行きが延びるにつれて、中庭、裏庭（4型）をもつし、新型住戸（建て替えや改築により上記の伝統型住戸と異質な外観・構造を持つ住戸）の場合は前庭（6型）をもつ傾向を表しているが、裏庭（2型）、前庭、および裏庭（7型）をもつ場合は伝統型、新型住戸共にみられる。

このような敷地の空間構成を持つ接道型住戸（伝統型）における境界空間は、格子のファサード、平入りの屋根、深い底からなるシンボリックな緩衝空間として形成された。

ところが、今日の歴史的な生活環境において伝統的、シンボリックな境界空間は、店の間の延長として荷受け、子供の遊び、コミュニケーションの場としての広場的な性格を持っていた道空間の性状の変化と共に変化していく。すなわち、道路側の部屋が店の間から応接間などの用途へかわり、しかも道路に車が増え道路のヒューマンな小近隣の広場的なヒューマニティが失われる。そのため格子、軒下空間の伝統的な境界から住戸の前に前庭的な境界を持つ仕組みへ変わるのである。

3. 境界空間の構成原理

(1) 境界空間と生活欲求（行為）のかかわり

境界空間の変化は人間の欲求によるものであり、境界空間に対する人間の心理的欲求は、領域性（territoriality）、個人的空間（personal space）などの「見えない境界」としてとらえられる。その包括的概念であるプライバシーとして表現される欲求は、実際的にはプライ

バシーを守るための一連の境界的行為として現れる。すなわち、伝統的町家の表構えを改造したり、格子の外に駒寄せを設けたりしてプライバシーを固め、いわゆる境界空間の機能の変化との対応を図る。また、住戸と道路の間に植え鉢を置いたり、垣のような外囲いを設けたり、前庭をとるなど私的空間の必要性が強く意識されている⁶⁾。次に境界空間に関わる生活欲求として駐車スペースの確保があげられる。伝統的町家において建て替えや増築の時、主屋の前に駐車スペースを確保するために主屋をセットバックさせるとか出格子を外してかつての店の間を車庫として改造したり、軒下に駐車するなど自分の車を便利に駐車したいという欲求が実体化する。なお、ブロックでも一軒あるいは何軒の町家を壊し専用駐車場とする場合が目だつ。

また、住生活の中で自然と接触したいという欲求により庭空間を設けるし、草花の手入れをしたり、住戸の前を掃除したりする日常生活行為を通して境界空間は、近隣のコミュニケーションの場として機能する。なおブロックレベルで道路に対する各住戸の境界空間は、境界要素の開放、閉鎖性により各住戸のコミュニティーへの帰属意識を間接的に反映する。このような近隣のコミュニケーションが行われる場として家の中、家の前の道端などがあげられる。たとえば、家の中の場合は応接間（かつての店の間）、玄関先の土間、前庭で立話する行為が観察される。また、遊び場については家の中、道路、公園、社寺の境内があげられる。例えば、道路の場合は車の通行により遊び場として従来保たされてきた機能が失われ、不満が高くあげられる。このような生活行為（欲求）を満たすために既存の境界空間に手を加え、その構造が改造されるのである。

（２）伝統的境界要素の変遷特性

伝統的な境界空間は街区割り、町割り、敷地割りの様な都市計画などの歴史的要因が深くかわり、街路に接して間口いっぱいに建つ接道的境界として形成された。なお、道と住戸の境界は格子、庇などの表構えにより特徴付けられたが、さらに近世末期の奈良町では、18世紀末の敷地の拡張、併合により高塀を持つ町家の形態が現れ、塀、格子、庇などの表構えにより空間が形成された。

さて、奈良町の伝統的住居型は町家（一般型、前塀造、表屋造、前庭造、落棟造）や長屋、農家（いわゆる法蓮造）、社家（武家屋敷型）に分けられる⁷⁾。その中で対象地では主に一般型町家、長屋、前庭造、前塀造、表屋造があらわれた。それを道と境界面の特徴により伝統的境界類型としてとらえると、図-3の様に二つのタイプに分けられる。すなわち、Ⅰ型は主屋が道路の直面している場合であり、一般型町家、長屋、表屋造（a, b, c）の格子戸、出格子、横板、壁のような表構えや大規模一般型町家（d, e）、表屋造（f）の表構えと塀、蔵が境界面を成している。Ⅱ型は主屋を道路から引き込めて隙間をつくり、道との境には全面いっぱいに塀を建てその前に庭を取る場合であり、前庭造（a）、長屋（b）、前塀造（c）、武家屋敷型（d）の門、高塀などの外囲いが境界面を成している。

一般的な伝統的住居の境界空間は、出入り部分をセットバックさせて（隅欠け手法）街路に面する開口部に格子を設け、庇でかぶされる緩衝空間（軒下空間）を形成しているのが特徴である。それでⅠ型においては、出入り部分の隅欠け手法が踏襲されながら、表構え要素の変化により特徴付けられる。即ち、伝統的格子戸、スリア

ゲ戸のかわりにガラス付きの引き違い戸へ（a', b'）格子をはずしてモルタル塗の壁や金網または金属格子付きの出窓へ（a'）, 或は駐車スペースを備えるためのシャッター（c'）などで行われる。それは格子の材料の非経済性と同時に道に面する部屋の利用の変化とも関係があると考えられる。Ⅱ型においては板塀の材料の変化、門の構成要素の踏襲など伝統的外囲い要素の変化によるものと考えられる。特に半田地区で見かけられる伝統的町家の形態から逸脱した民家（前庭造）は、この辺りが寺院関係者の居宅であった⁸⁾ 歴史的要因と関係があると考えられる。また、この辺りでは閉鎖的塀を外構えとする家が数多く見かけられるが、それは奈良奉行所前の業務地区であり、町家居住の必要があったことから純住宅地への変化として考えられる。

ブロックの道景観は上記の住戸の境界要素

図-3 伝統的境界類型

により、すなわち、軒の高さ、庇の位置、伝統的表構えのファサードがトオリに向かって並んで、全体景観に連続性を与える。半田地区では二つの類型が混在し、建物の間口、壁面の線に一定の調子がないため変化に富む道景観を形成している。すなわち、建築線が道の境界線より奥にある住戸が多く道幅が同じ様な元興寺地区と比べ、道景観の広がりを感じさせる。また、まちかどに配置されている社寺（元興寺地区の御霊神社、半田地区の念声寺）は、景観の中でアイストップの役割を果たして道景観の焦点になっている。

（３）境界空間における緑の形態的特徴

歴史的な生活環境と緑の流動の関係は、生活欲求の変化に伴う緑の役割や形態の変化により特徴付けられる。すなわち、近世の伝統的住居における緑は細長い敷地の内部に取り込まれ、収納、サービスヤード、観賞などの生活欲求に応じて中庭、裏庭の内部的緑として形成された。このような特徴は最近まで続いて、対象地の昭和37年の航空写真を見ると、近世の敷地割りとはほぼ一致する敷地において中庭、裏庭の内部的緑が大部分を占めている。しかし、昭和57年の航空写真では建て替えなどにより住戸が後退し、道路との境界空間として前庭を取る傾向が読み取れる。（図-2、4参照）元興寺地区の場合奥行きが長く比較的中庭を広く取っており、商品の収納や作業、草花づくりなどのサービスヤード的利用が行われるし、採光、観賞のスペースとして中庭を取っている。しかし、主屋を後退させて前庭をできるだけ広くとると主屋を引き込んで前庭と裏庭を取ることで、伝統的住居の特徴である中庭の連続性が壊れていく現象を見せている。このような住戸の境界空間における緑は、道と住戸の境界として緑自体が境界要素になるし、外からや庭の内部を見え難くする囲いとしての緩衝、遮蔽機能、境界を明

図-8 境界空間における緑の形態的特性

らかにする標識的機能、住戸の内、外部をつなぐ連結機能を持つ、外部的緑となる。

従って、調査対象地の緑の形態的特性は境界空間の類型に基づき、緑の機能及び緑化型（点状、列状、面状）、外囲いの開閉により図-5のようにとらえられる。伝統型I型の場合は軒下空間に植え鉢をおくとか格子窓の下に群植して軒下空間の緩衝機能を強める。新型I型は接道し庇がかぶされている窓下の空間に灌木を群植するなど標識的に境界を示す。伝統型II型の緑は高塀の様な閉鎖的囲いの境界部と住戸の内部を連結する機能を持つ。長屋及び長屋門を持つロージの場合門が閉鎖的であり、緑は連結機能を持つ。新型II型の前庭を持つ場合の多くは、石垣などの外囲いが目の高さより低く住戸が開放的であり、緑は道と面する部屋の前に配置される。それは主屋の出入口がドアなど閉鎖的であるので、垣、鉄柵などの外囲いが開放的になり、樹木により道からの視線を遮ろうとするものである。また、新型II型において住戸の前に駐車スペースを持つ場合が多くみられ、出入空間と駐車スペースを住戸内部へつなぐ連結機能を持つ。

4. 境界空間の構成原理の因果関係

歴史的な生活環境において生活空間成層の最小単位として住居を取り上げ、生活行為とのかかわり、伝統的境界要素の変遷特性、緑の形態的特性の把握を通して境界空間の構成原理を検討した。その三

図-4 ブロック内の緑の分布

つの項目を景観評価の基準として、対象地の各ブロックの住戸を住居とその他（店舗、駐車場など）で、また住居は伝統型と新型に分け住居レベル及びブロックレベルで景観評価を行った。まず、住居レベルの生活欲求項目の評価はプライバシーの確保、駐車スペースの保持など欲求について、ほぼ満足（A）、やや満足（B）、やや不満（C）、不満（D）。境界要素の変遷項目の評価は、接道性など伝統型住居の特質と表構えなど伝統的境界要素の保持について、完全保持（A）、要素的部分的变化、伝統的様式及び雰囲気保持（B）、要素の変化、伝統的様式保持（C）、新しい要素、様式の保持（D）。緑の特性項目の評価は境界空間の緑化型や規模などにより、大規模の面状緑化（A）、中規模の点状緑化（B）、小規模の点状緑化（C）、緑化されてない（D）の4段階に分けて行った。

また、ブロックレベルの生活行為項目の評価はオモテでの遊び、交流などの行為や住戸の開放度について、行為が活発で、開放的（A）、行為が活発で、やや閉鎖的（B）、行為が消極的で、やや閉鎖的（C）、行為を阻害し、閉鎖的（D）。境界要素の変遷特性項目は軒高など伝統的外観の連続性などについて、外観が連続的で、ブロックの景観と調和（A）、外観的部分的变化、景観調和（B）、外観の変化、景観維持（C）、景観の連続性の阻害（D）。緑の特性項目は中庭の連続性と境界緑化効果などにより、連続的で、境界緑化効果が高い（A）連続的で、境界緑化効果がやや高い（B）、不連続的で、境界緑化効果がやや低い（C）、緑化されてない（D）の4段階に分けて評価した。

このように評価された三つの項目の相互関係を分析した結果が図-6である。図の横軸は全住戸の中で伝統型、新型住戸の占める比率—住居度（伝統型住居/全住戸数、伝統型+新型住居/全住戸数）を示し、伝統型住居の占

める比率により伝統的住居の特性を、住居の占める割合により新型と伝統型が混在する場合の特性をとらえた。縦軸は各戸別の景観評価について4（A）、3（B）、2（C）、1（D）のウェイトを加え計算して（各戸別の評価値/ブロックの戸数×4）得られた割合を示す。例としてあげている元興寺Eブロックは、伝統型48%、新型17%、その他が35%を占めている。比較的伝統型の割合が高く伝統的境界要素の変遷項目及び生活行為項目の評価が高い一方、緑の形態的特性項目の評価は低くなる。しかし、新型の評価を合わせると変遷項目の評価が低くなる反面、緑の特性項目、生活行為項目の評価が高くなる。これは新型住居の影響によるものである。全住戸において変遷特性項目の評価がやや増加する反面、生活行為項目はやや低く評価される。これはその他に含まれている伝統型住居の影響によるものと考えられる。一方、半田Aブロックは伝統型27%、新型50%、その他23%であり、比較的新型的割合が高く新型は主にⅡ型が占めている。その結果、変遷特性項目の評価が低くなる反面、生活行為及び緑の形態的特性の項目は比較的高く評価される。一方、ブロック全体を対象とする場合生活行為、緑、変遷特性の項目が全て低く評価される。これも、その他の影響によるものである。

また、住居、ブロックレベルで評価された結果を対象地全体に対して比較してみると図-7のようになる。三つの項目による評価はバラついてはいるが、大部分住居レベルの評価がブロックレベルの評価より高い傾向をみせている。それはブロックレベルにおいて三項目の連続性の崩壊によるものと考えられる。

一方、境界類型と三つの項目に対する景観評価との相互関係は、一定の関係は表れていないが、変遷特性項目の場合、住居戸数に対するⅠ型（接道型）の割合が大きくなるにつれて景観評価が高くなる傾向をみせている。

図-6 三要素の景観評価による比較

図-7 住居、ブロックLEVELの景観評価の比較

図－8 境界類型と変遷特性項目の相関

(図－8 参照)

以上の分析から、住欲求の満足と緑の評価が高まる今日の都市整備は歴史の変遷の評価を下げる傾向、また伝統型住居が多数を占める地区では、変遷特性や生活欲求の評価が増す一方で緑の評価が低くなる結果がみられた。

5. おわりに

今日の歴史的生活環境は生活空間の拡大に伴う成層間の境界空間により特徴づけられる。このような特徴は住居・ブロックレベルにおいて、住戸と道の接点における生活欲求の変化に伴う伝統的境界要素の変遷特性、緑の形態的特性の相互関係の把握によりとらえられる。この相互関係は生活欲求の満足につれて、変遷特性の評価が低下、前庭などの緑の境界空間への積極的導入による緑の形態的特性項目の評価が上昇する傾向としてあらわれ

る。なお住居、ブロックの成層間において住戸内部に緑を含む場合、住居レベルよりブロックレベルの緑の特性項目の評価が高くなる。また、境界類型Ⅰ型は変遷特性項目の評価を上昇させるし、Ⅱ型は緑の特性項目の評価を高める傾向がとらえられる。

今後の課題として、境界空間の構成原理に対する評価規準の研究を進める必要があるし、地域に固有性により境界空間の様態が多様であり、その異なる諸様相に対応する必要がある。また、ブロック内部の境界空間の性状が異なるロージ空間や地区、都市の境界空間にも研究の範囲を広げる必要がある。

参 考 文 献

- 1) 近藤公夫 (1973) : 環境修景論 ; 地球社 ; 10-16
同上 (1965) : エキスティブ理論と白川公園計画, 造園雑誌, vol. 28, No. 3, 4 : 3-6
- 2) 同上 (1986) : 生活環境論序説 : 2-7
- 3) 昭和37年奈良文化財研究所, 昭和57年11月奈良市で撮ったものであり, 縮尺は 1 / 8,000 である。
- 4) 藤井英二郎 (1984) : 伝統的生活空間を構成する境界の特性と変化 : 千葉大学環境科学研究報告, 第10巻 : 45-48
- 5) 宮城俊作 (1984) : 町家型住宅の街区におけるオープンスペースに関する考察 : 造園雑誌, vol. 47, No. 5 : 269-274
- 6) 歴史的環境をめぐる研究会 (1978) : 保全的刷新-奈良三新屋の調査 : 32-68
- 7) 奈良市教育委員会 (1983) : 奈良町 (Ⅰ) : 45-47, 同上 (1986) 奈良町 (Ⅲ) : 29-36
- 8) 工藤圭章 (1962) : ナラの街区変遷過程の研究 : 57-68

Summary : The aim of this study is to introduce the principles of composition on the interface space in the historic environment for living, which is composed of several levels such as each dwelling, block, neighborhood, community etc. Through the case studies of the old urban area in Nara, it was understood and examined that the principles of composition on the interface space are composed of three characteristic components ; human needs for interface space, changes of traditional interface element and roles & physical forms of the green space. In order to verify the principles of composition, we deal with the evaluation of landscape, which compared the values of dwelling to that of block level. An analysis was carried out of three components and the effect the traditional type of interface element has on them. As a result, it was evident that there are, in the circumstance, qualitative tendencies ; according as the satisfaction of the human needs for interface space, the evaluation of changes of interface element decreased and that of green space increased in the relationship between three components.